



Title	Resultative Constructions in English and Japanese
Author(s)	浅井, 良策
Citation	大阪大学, 2016, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/55629
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 (浅井良策)

論文題名

Resultative Constructions in English and Japanese (英語と日本語の結果構文について)

論文内容の要旨

本研究では英語と日本語の結果構文について考察し、それぞれの結果構文が成立する仕組みについて分析した。本論文の前半では英語の結果構文について議論した。これまでの先行研究では結果構文の成立に関して、項構造構文 (Goldberg 1995)の役割や百科事典的意味を含めた動詞の役割(Boas 2003)が注目されてきた。しかしながら、本研究では、両者のアプローチでは扱いきれないタイプの結果構文が存在することが指摘され、これらを適切に扱うためには結果句の役割に焦点を当てる必要があることを主張した。

まず、2章では結果構文の成立が事実上、個々の動詞の語彙特性のみによって規定されると主張するBoas (2003) を批判的に検討し、以下の二点を示した。

(1) a. 英語の結果構文([NP1 V NP2 AP]タイプ)の成立に関して、必ずしも全て個々の動詞の語彙指定に頼る必要はなく、Boas(2003)の想定する個々の動詞の意味を超えたレベルで一般化及び予測可能な部分が存在する。

b. さらに、個々の動詞の語彙指定に頼るべきではない部分も存在する。

この主張を行う際、結果構文を動詞自体に状態変化の意味が含まれるVerb-basedタイプとGoldberg(1995)の項構造構文分析で扱えるASC (argument structure construction)-basedタイプとに区別するIwata(2008)の分析を採用した。前者のタイプの成立はBoas (2003)が主張するように個々の動詞の語彙指定に頼らなければならないと言えるが、後者のタイプの成立は動詞が構文の表す事象をもたらす状態を指定し、またそれが継続的な循環的(cyclic)事態を表すという条件のもとで一般化可能であった。また、結果句としてasleepを取る結果構文を用いて(1b)を証明した。この結果句は、使役関係を表さない結果構文を生み出すという点で他の結果句と異なる性質を持っていることを指摘した。

(2) a. ...he drank too much mulled sack and sang himself hoarse. [COCA]

b. John sang the baby asleep. (Rothstein 2004:131)

(2)のペアのように同一の動詞で使役関係を表す文と表さない文を生み出され得るという事実は結果構文の全体の解釈が最終的に結果句によって決定づけられる場合も存在することを示唆しているものであった。(2b)のように使役関係を表さず単なる時間的推移を表す結果構文は、用法基盤モデルの考え方を援用すると、ASC-basedタイプとVerb-basedタイプの共通性を捉えた上位スキーマによって認可されるものとして分析可能であった。

3章では、to exhaustionとinto exhaustionを結果句にとる結果構文が使用される文脈の相違について調査し、前者が行為者の意図が関わる肯定的な文脈で用いられる傾向がある一方で後者は行為者の意図が関わらない否定的な文脈で用いられる傾向があることを示した。この相違はto句とinto句の一般的な相違に帰属させることができるかと主張したが、このことは、結果構文の全体的な解釈には個々の結果句の意味に注目する必要があるという主張をさらに例証するものであった。

4章と5章では、結果構文がReflexiveパターンとBare XPパターンのいずれを取るかについての条件を両パターンを許す事例の観察を通して考察した。4章では、この選択に関してRappaport Hovav and Levin (2001)が主張する時間的依存性ではなく動詞が喚起する百科事典的知識が重要であることを示した。より具体的には結果句が動詞の喚起する百科事典的意味から予測可能かどうかという観点からReflexiveパターンとBare XPパターンが区別されるべきであると主張した。この特徴づけによって、(3a)と(3b)の容認性の相違が説明される。

(3) a. Seeking total control of his career, he negotiated out of a contract that had granted him advances of \$ 10 million per album. (USA TODAY, 11/12, 1996)

b. *The assumption is that Saddam would never negotiate out of power.

cf. The assumption is that Saddam would never negotiate himself out of power. (Christian Science Monitor, 9/4, 1990)

両事例とも動詞と結果句がそれぞれ表す下位事象間に時間的依存性が認められない点では同じであるが、世界知識に照らし合わせた場合、negotiateという行為から通常喚起される結果はout of powerではなくout of contractという状態であることは明らかである。というのもout of contractはnegotiateという行為の目的として理解されるものだからである。

この観察は個々の動詞の百科事典的意味を問題にするBoas (2003)のアプローチと整合するものと言える。しかしその一方で、5章では動詞の百科事典的意味のみでは説明できない結果句の喚起する百科事典的知識を参照して初めて捉えられるBare XPパターンも存在することを指摘した。

(4) a. *Bob ran into a frenzy. (Levin and Rappaport Hovav 1995: 207)

b Stark was the recipient of possession in some space which he embellished by brushing off a couple of tackles, only then to run crossfield into trouble. [BNC]

(4)に見られるBare XPパターンの結果句は両者とも走るという行為から通常想定されない結果状態を表している。それにも関わらず(4b)が成立することをLangacker (1987, 1991)が提案するConceptual DependenceとCroft (1993)が指摘するDomain highlightingという概念によって説明した。結果構文をConceptual Dependenceの観点から分析すると、結果句が動詞の表す行為の結果状態を精緻化する点において動詞が結果句に依存していることになる。(4a)が容認されないのは結果句の意味が動詞の意味内容を精緻化できるほどに、両者の間で下位構造の共通性が見出されないためである。一方で、(4b)では結果句into troubleは状態変化だけではなく位置変化の経路も喚起し得るので、動詞runが依存の対象となる結果句into troubleの空間経路ドメインを際立たせることで、動詞と結果句の意味的結束性が保証されることになる。

それ以後の章からは、日本語の結果構文について考察を行った。6章では、日本語の結果句の形式として使用される形容詞-ク形自体について考察し、従来の研究の見方とは異なり、それが副詞的な性質だけでなく形容詞的な性質をより積極的に認める必要があることを主張した。7章では、これまでの日本語の結果構文の研究では指摘されてこなかった「汚く」という結果句が生起する事例について分析した。

(5) a. ジョンがうっかり壁を汚く塗った。

b. 誰かが会社のトイレをうっかり汚く使った。

「汚い」結果構文は(5a)のように、動詞の意味に含意されない結果状態を表したり、(5b)のように、そもそも変化結果自体を含意しない行為動詞であっても結果構文を形成したりする点において「通常の」結果構文とは異なる特異な振る舞いを示すことを観察した。これらの結果構文もLangacker (1987, 1991)が提案するConceptual Dependenceを援用することで適切に扱えることを示した。Conceptual Dependenceのアプローチでは、二種類の構成表現が統合して複合的な表現を形成する際、潜在的に両者の要素が互いに精緻化し合うことは普通のことである。従って、このアプローチに基づくと、「通常の」結果構文に見られるような結果句が動詞によってすでに含意された下位構造を精緻化する関係だけでなく動詞が結果句に内在する下位構造を精緻化する関係も自然な形で想定可能となる。そして「汚い」結果構文の分析には後者の精緻化関係を認める必要があることを主張した。この主張によって、日本語においても結果句の喚起する百科事典的知識が重要な役割を果たすことが確認された。

最後に、8章では、英語と日本の結果構文を比較・対照しその相違点について論じた。最近の研究では、英語の結果構文が「因果関係」という概念を基に拡張する一方で、日本語の結果構文は「目的」という概念を基に拡張すると指摘されている(草山・一戸2005、Murao 2009)。しかしながら、英語の結果構文の中には(6)に示されるように、意図された結果の解釈が要求される場合もある。日本語においても(5)のように「目的」とは解釈され得ない偶発的な結果を表す結果構文が成立する。

(6) a. The wise dog barked his master awake to warn him of the fire.

b. *A stray dog in the distance barked the sleeping child awake. (影山2007:39)

そこで、本論文では英語の結果構文と日本語の結果構文の相違は「因果関係」と「主観的評価」の対立という観点からの方がより適切に捉えられることを示唆した。また、Talmy (2000)によるサテライト枠付け言語(Satellite-framed language)と動詞枠付け言語(Verb-framed language)の区別を取り入れることで、英語の結果構文の方が日本語の結果構文より結果状態を含意しない行為動詞が生起するタイプが生産的であることや英語の結果構文が「目的」という概念を基に拡張し得ることを説明した。さらに、動詞枠付け言語に分類される言語であっても、原因事象と結果事象間の意味的統合性が高い状況タイプはサテライト枠付けパターンでコード化される傾向にあるというCroft et.al (2010)の観察に基づき、日本語において、(5)のような「汚い」結果構文が成立することを論じた。最後に、(7)に見られるような事例を指摘し、これらが「否定的な結果状態」という「汚い」結果構文との共通性を捉えた上位スキーマによって認可された日本語結果構文のさらなる拡張事例であることを示唆した。

(7) a. 弟は買ったばかりの新車を趣味悪く改造した。

b. お母さんがうっかりご飯をまずく炊いた

以上、本研究では英語と日本語の結果構文における結果句の役割に焦点を当てることでより広範囲の言語事例を扱えることを示した。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (浅井良策)			
	(職)	氏 名	
論文審査担当者	主 査	教授	木内良行
	副 査	名誉教授	杉本孝司
	副 査	教授	三原健一
	副 査	教授	由本陽子
	副 査	准教授	田村幸誠

論文審査の結果の要旨

浅井良策氏の学位請求論文“Resultative Constructions in English and Japanese”は、英語と日本語の結果構文について、先行研究において結果構文全体の項構造のあり方や動詞の語彙特性の考察だけでは捉えられなかった部分を、とくに結果句に注目し、結果句の意味と結果構文全体との関わり方から考察、分析したものである。

従来、結果構文については、動詞自体に状態変化の意味が含まれるかどうかで大きく二分されること、動詞と結果句との間に意味的相関関係があること、また逆に類似した意味の動詞であっても結果構文を成立させる動詞とそうでない動詞があることが指摘されており、記述の方法としては、結果構文全体をその項構造から考えていく構文文法的な捉え方と、個々の動詞の意味記述とその用法から出発する用法基盤的な考え方が提案されてきた。本論文では、その両者のそれぞれの利点を生かしつつ、個々の動詞の意味に関わらず一般化が可能な部分が存在することを示すと同時に、結果構文の持つ意味の拡張のあり方に注目し、結果構文の成立にあたっては、百科事典的知識や文脈をも含めた文全体の意味のあり方が重要な役割を果たしていることが論じられており、その点において本論文は大きな意義のある論考である。

本論文各章については、1章においてまず問題点と全体の構成が示された後、2章において、先行研究の批判をもとに、結果句の意味が構文全体に及ぼす影響についての重要性がまず英語に関して指摘され、次章以降でより具体的な事例についての考察が行われている。3章では、to exhaustion と into exhaustion を結果句にとる結果構文の違い、4章と5章では、結果構文が再帰代名詞を必要とする場合とそうでない場合の違いについて、それぞれに細かな記述を行うことにより、それらの相違を明らかにするためには動詞の喚起する百科事典的意味に加え、文脈に依存する行為者の意図等をも考慮する必要があることが説得力を持って示されている。6章以降は日本語の結果構文についての記述であり、まず6章で、日本語における結果句の「ク形」形容詞について、従来の一般的な見解とは異なり、それが構文的に副詞的性質のみならず形容詞的な性質をも併せ持つことを主張し、7章ではとくに「汚く」が結果句として現れるときの用法に関してその特異性を考察し、動詞と結果句の間に相互的な意味の依存性を認めるべきであることが強く主張されている。ただし、この章では要となる動詞の含意に関する記述が十分ではないのに加え、結果句の解釈の仕方にも不明瞭なところがあり、議論の仕方については多少の難点が認められる。最終章においては、日英語の結果構文の違いについて、先行研究をもとに新たな視点が提案されているが、今後の研究の方向性が示唆されるにとどまっており、議論はさらに深められるべきであるものの、そこで示された類型論からの援用による考え方は興味深く、将来的な発展を予想させる内容となっている。

論文全体を通じて、文章は総じて簡潔、明快であり、分かりやすく説得力のある議論となっている。部分的に議論の立て方が性急過ぎたり、用いられている基本概念のうちその定義が明瞭さに欠けるものがあつたりはするが、しかしそのことは本論文の価値を損なうものではない。筆者の明確で独自の観点による、具体的で豊富な例文に基づいた実証的で一貫性のある研究であり、結果構文の今後の研究の発展に十分に寄与しうる論文である。

以上より、この論文は博士（言語文化学）の学位論文として価値あるものと認める。